

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720377

研究課題名(和文)縄文時代における居住形態の研究

研究課題名(英文)The research of settlement pattern at Jomon period

研究代表者

菅野 智則 (KANNO, TOMONORI)

東北大学・埋蔵文化財調査室・一般職員

研究者番号：30400196

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、縄文時代における居住形態の様相について通時的に把握することを目的とし、集落遺跡に関する分析を行った。その結果、複数の大きな画期が認められた。前期前半の北上川流域では長方形大型住居跡による集落遺跡が出現し、顕著な地域性が認められる。その後、長方形大型住居跡は消失するが、集落遺跡の特徴には継続性が認められ、中期前半は穏やかな変質期として考えられる。中期後半には、再び新たな場所に集落が形成され、そこを拠点とし遺跡数が増加し、集落遺跡数が最大となる。このような結果からは、縄文時代の文化的特徴が必ずしも固定的、直線的に発生・展開しているのではなく、人の移動を含め流動的な様相が想定できる。

研究成果の概要(英文)：This study was intended to understand the diachronic about aspects of settlement patterns in the Jomon period. As a result, Plural big characteristics were recognized. In Kitakami River basin in the first half of the early Jomon period, Rectangular large pit dwellings appeared, and the locality which deserved attention was accepted. In quality period of the middle Jomon period, those pit dwelling s disappears, but the characteristic of settlement sites has continuity. This period is recognized as the slow change of the culture. In the latter half of middle Jomon period, Settlement is formed in the new place again, and the number of the sites increases. From this result, The culture of the Jomon period does not unfold linearly, and it is thought that it is a changeable aspect.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：縄文時代 考古学 集落

1. 研究開始当初の背景

縄文時代は、土器型式に基づき草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に区分されている。そして、かつては文化の連続的な発展段階が想定されてきた。こうした土器型式の研究等を踏まえ、これまでの集落研究では、データ分析結果の時空間的な解釈に関して、土器型式等の個別の遺構・遺物の分布をもとに、ある程度の狭い土地に固定的な通時的な文化圏が想定されてきた。しかし、近年の縄文土器研究では、決して連続的な一系統的発展をしたのではないことが指摘されている。そして、これまでに行ってきた東北地方の縄文集落遺跡の予察的研究からは、その実態はより複雑かつ変動的であり、明瞭に線を引く文化圏の様な形で提示することは難しいことが予想された。

縄文時代の集落遺跡に関する研究は、居住施設等の遺構を中心として、様々な観点から分析が進められてきた。そして、現在までに数多くの集落遺跡の調査が実施され、集落に関するデータが大量に蓄積されつつある。しかし、これらのデータは膨大かつ複雑であるため、個別的な調査事例の報告に留まることが多く、様々な観点を総合化するような分析研究は多くない。そのような問題点を克服するため、膨大なデータを格納するデータベース構築とそれに伴う属性の捉え方に関する方法論の確立を推し進める必要がある。

2. 研究の目的

これまでに、北上川流域・仙台湾地域に分布する集落遺跡を対象とし、当時の居住形態に関する研究を進めてきた。例えば、前期中頃における遺跡の減少から増加へと転じる時期には、ある地域には長方形の大型住居により構成される環状集落が出現するが、別の地域では平地式住居を用いて低湿地へ進出することなど、様々な特徴的様相が地域ごとに確認できる。この現象について、地域性という用語を用いて解釈を行ったが、こうした地域性はそのまま継続することは少なく、新たな要素が加わりつつ変質したり、あるいは消滅したりして、次の時期に全く受け継がれない事例もあることが理解できた。他の時期に関する事例の検討を含めると、遺跡数が少ない時期や集落遺跡が認められない時期、特徴的な遺構が出現する時期等、様々な時期に特徴的な様相が捉えられた。また、通時的に検討するならば、集落遺跡・住居跡数の増減は、必ずしも直進的あるいは安定的な変化を示してはいない。そして、これらの値の増減が顕著になる時期においては、とくに竪穴住居構造の変化や集落構成に関する特徴的な変質を伴っていることが理解できた。

これらのことを踏まえ、本研究では、これまでの研究を進展させ、東北地方の縄文時代における通時的かつ具体的な居住形態の様相について検討し、その詳細について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究における分析対象地域として、当初は東北地方全域の主要な地域を予定していた。しかし、2011年に発生した東日本大震災のため、資料確認調査等が行えない地域も生じたため、これまでの基礎データの蓄積がある北上川流域・仙台湾地域を主体的な対象地域とした。その他の地域に関しては補助的なデータとし、可能な限り資料の収集に務めた。

基礎データとして、遺跡発掘調査報告書等の文献に基づく集落遺跡データベースの補強を行い、分析の核となるデータの確保を行った。この遺跡データベースの作成は、これまで竪穴住居跡のデータ集積を中心に進めてきた。この竪穴住居跡のデータは、プランメータなどを用いて、面積や深さなどの基礎属性のほか、竪穴住居跡の場合は柱穴規模、炉跡などの付随する属性を図面から計測し、定量化を行った。また、図面に関してはフラッドヘッドスキャナを用いて画像データ化した。

これらのデータを基礎とし、東北地方における居住形態の具体的な様相について通時的な考察を実施した。

4. 研究成果

分析の結果、複数の大きな画期が認められた。

(1) 前期前葉～中葉 仙台湾地域における前期前葉には、方形プランを基調とする竪穴住居跡が集中する集落遺跡が認められる。このような集落遺跡は、遺跡の継続性等の点からも早期以来の継続的な集落とは考えづらく、新たに作られた拠点的な集落遺跡であることが窺える。しかし、その後にはそのような集落遺跡は継続しない。一方、前期前葉後半の北上川中流域には、長方形大型竪穴住居跡を主体とする集落遺跡が展開するようになる。この時期は、地域性が顕著に認められる時期として考えられる。

(2) 中期前葉～中葉 北上川流域の中期前葉には、長方形大型住居跡主体の集落遺跡は消失し、小・中規模の集落遺跡が継続的に出現する。中期中葉には、竪穴住居跡の数も増加し、規模の大きな集落遺跡が増えると共に、山地内にまでも資源活用を目的とした小規模な集落遺跡が進出する。この中期前葉から中期中葉の時期を、前期的な集落の解体からの変質期と捉えた。そして、この変質は、この時期の集落遺跡の特徴・継続性等から各地域における文化の漸移的变化、そして地域間関係を背景とした穏やかな変質として理解した。

(3) 中期後葉～末葉 北上川中流域では、中期後葉前半に新たな場所に集落が形成され、そこを拠点とし遺跡数が増加する。中期末葉前半には、山地内部を含め小規模集落遺跡が著しく増加し、縄文時代の中で集落遺跡数が最大となることから、遺跡間関係が最も

複雑化した時期として捉えられる。中期末葉後半には、特定の居住地への集中化が認められる。それは、新たな居住地の形成とも考えられるが、直後の後期初頭・前葉には消失する。

(4) 後期初頭～前葉 後期になると、複式炉を有する竪穴住居跡によって構成される集落遺跡が、大きく変質する。掘立柱建物跡が主体となる集落には、季節的な集落遺跡の可能性が指摘されている。通時的な集落遺跡の変遷の中で、機能分化がより進行した状態として、後期から認められる掘立柱建物跡主体の集落遺跡が、季節的な居住地であるという解釈は理解しやすい。そして、後期前葉以降の集落は、基本的には中期後半以来の継続性を有してはいない。この後期前葉以降の集落遺跡の変質では、集落遺跡の減少や立地の変化のほかに、敷石住居や、立石を用いた墓等の配石の存在が目立つようになる。同時期の東北地方北部では環状列石が構築され、集落遺跡数も再び増加し始め、後期後半には環状集落を形成する程の大規模集落遺跡が出現する。そして、東北地方南部では、中部・関東地方を起源とする柄鏡形の敷石住居が流入するようになり、集落形態も大きく変化する。

このように、ある地域を通時的に検討すると、竪穴住居跡数が急激に増える時期、あるいは竪穴住居跡が激減する時期が複数回存在し、そうした時期には集落遺跡の諸特徴が大きく変化する様相が窺える。これは、縄文集落が固定的にその場で継続的に発展してきたとは言えないことを示している。おそらく、前期前葉の今熊野・泉遺跡、中期後葉の柿ノ木平遺跡南東集落、中期末葉の湯沢遺跡等は、そうした変化期において新たな居住地形成の役割を担った遺跡であるように考えられる。その居住地の形成にあたり、他地域から人が移動してきたのか、あるいは周辺地域の集落が集結等したのかという点では、その背景や内容に差異があるものと考えられる。そして、こうした場合、前時期からの諸特徴の系統を考古学的に追えない場合、それは他地域からの移動ということを考えやすい。

例えば、石囲炉、土器埋設炉等の前時期までの伝統を残しつつ、中期後葉以降に複式炉も受容した様相を示す柳上遺跡に対して、湯沢遺跡ではほぼ土器埋設を主体とし複式炉はほぼ存在しない。これは、柳上遺跡は在地的な集団であり、湯沢遺跡を形成したのは別な集団なのではないかと以前に推定した。各地域の分析をしなければ、湯沢遺跡を形成した集団の由来は今のところ不明であるはあるが、明らかに連続性を迎れない遺跡として注目できる。また、このような継続しない特徴を示す集落遺跡としては、中期中葉における西田遺跡がある。中期中葉前半における環状集落構成、中期中葉後半における小型の方形竪穴住居跡等、西田遺跡には在地的な連続

性をたどり難い特徴が認められ、北上川流域の集落遺跡の中で明らかに異質である。また、似たような構成の中期後葉の新田 遺跡の様相も同様である。そして、この新田 遺跡の特徴は、北陸・会津地方の同時期の集落遺跡と類似はしているが、こうした類似性を他地域からの移住という一点で解釈してよいか疑問点は残る。そして、こうした集落構成のあり方は、居住形態という生業等の生活スタイルに密接に関わる事項でもあり、「他地域からの影響」という言葉で簡単に捉えられるものではない。様々な考古資料を含め、総合的に検討する必要があるものと考えられる。

こうした様相に比べ、後期前半という時期は、多くの集落遺跡の特徴が劇的に変化する時期として理解できる。関東地方などで認められる敷石の慣習が流入してくることも大きな特徴ではあるが、最も大きく変化したのは遺跡立地である。本稿で検討してきた前期以来の集落遺跡は、河川側の高台に位置しているが、後期以降になると沖積地等の定地に形成することが非常に多くなる。そのため発掘事例も少なく、集落遺跡が激減したかのように見受けられるが、後期の集落遺跡の多くが沖積地にも存在する可能性を否定しきれない。この立地の変化は、前期以来の生業スタイルを含めた居住形態が大きく変化したことを示している。一方で、馬淵川下流域の八戸市等では後期においても高台に位置しており、後期後半になって大規模な環状集落遺跡が出現する。このような特徴は、かつて北上川流域でも認められた特徴が、後期以降になって強く顕在化したものと考えられる。

前期以降形成されてきた居住形態が、後期前半に一変するあり方は、おそらくそれまでに構築してきた遺跡間関係などの様々なシステムが崩れたものと考えられる。こうした変化を理解するためには、年代測定等の活用によって自然環境のイベントと重ねあわせることも重要であるが、考古学的に遺物・遺構の系統を捉えるような研究を更に実践する必要があるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

菅野智則、宮城県における縄文中期から後期にかけての様相、東北地方における中期/後期変動期:4.3ka イベントに関する考古学現象1、査読無、2012年、71-83頁

菅野智則、北上川中流域における縄文時代中期集落に関する基礎的研究、東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的综合研究、査読無、2012年、107-123頁

[学会発表](計2件)

菅野智則、東北地方における縄文前・中期

集落の展開、2013 年度東北史学会大会
2013 年 10 月 12 日、宮城県・東北大学

菅野智則、宮城県における縄文中期から後
期にかけての様相、東北地方における中期/
後期変動期:4.3 k a イベントに関する考古
学現象 1、2012 年 7 月 15 日、山形県・東北
芸術工科大学

〔図書〕(計 1 件)

菅野智則、縄文時代における居住形態の研
究、東北大学埋蔵文化財調査室菅野智則、
2014 年、1-47 頁

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅野 智則 (KANNO, TOMONORI)

東北大学・埋蔵文化財調査室・一般職員

研究者番号：30400196

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：